

人はパンだけで生きるものではない

ルカ 4 : 1 - 13



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年3月10日

大齋節第1主日

奈良基督教会にて

イエスさまが人々の前に現れて宣教活動を開始される前に、どうしても必要なことがありました。それは、神さまから力をいただくこと。もう一つはご自分に与えられた使命をはっきりと自覚することです。使命というのは、生きて働く目的であり、また自分が必ず歩むべき道、と言い換えてもよいでしょう。

神さまから力をいただき、また目的を明確に自覚する、というのは、わたしたちにとっても必要です。教会の中で役割を引き受けることもそうですし、また家庭や広くは社会のなかで、わたしたちが信徒として生きようとすれば、神の力を受けることが必要であり、また神からいただく目的・使命をはっきり知る、ということが必要です。そうでなければ、わたしたちは力と道を失ってしまいます。

さてイエスさまはすでに、ヨルダン川でヨハネから受けられた洗礼によって、神の力＝聖霊を宿されていました。またそのとき神の声を聞くことによって、ご自分の使命をはっきりと自覚されました。しかしこの洗礼のほかにも、神さまの業を行うために、もう一つ必要なことがあったのです。それが、荒野での試練・誘惑です。試練・誘惑を経験することをとおして、イエスさまご自身の目的は明確になり、かつ力をさらに得られるのです。

「4:1 さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、

2 四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。」ルカ 4:1-2

40 日の間、何も食べずただ一人荒れ野で過ごし、体も心も弱り果てておられます。

「その期間が終わると空腹を覚えられた」と書かれています。が、「空腹を覚えられた」では翻訳としては弱い気がします。飢餓です。イエスは飢えられたのです。生命の危機に瀕しておられた。同時に、気力も精神力もなえ果てておられます。そのようなときに、イエスは自分に語りかける声を聞かれる。

「4:3 そこで、悪魔はイエスに言った。『神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。』」ルカ 4:3

悪魔、誘惑する者の目的は明確です。イエスから力を奪い、イエスの使命、目的を見失わせ、イエスの歩まれる道を踏み外させてしまうことです。しかし悪魔は、そのような目的、意図を隠して忍び寄ります。言葉巧みに近づきます。

「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」

「神の子なら」——これが危うい。これがサタンの巧妙さです。言わば正しいことを言い、それを相手に受け入れさせて、そうして自分の悪しき意図に相手を引きずり込もうとする。

ここでイエスが石をパンに変えることができたかどうかを議論しても意味がありません。

悪魔は、人を絶望的な無力感の中に引き入れようとする。良い目的や願いを持っている人を絶望させようとする。どうせ自分には力がない。自分がそんなことを考えたり、しようとしたりするのには愚かなまちがったことだ——こうしてわたしたちは自分に与えられた信仰の道を見失い、神さまのために良いことをして生きようとする願いを失ってしまう。このとき、サタンはわたしたちに自分の無力さと絶望だけに目を向けさせようとして、もう一つのことに目を向けさせないようにするのです。もう一つのこととは、神さまです。

自分は無力であるけれども、神が共におられる。神がこの無力なわたしをとおして働かれる——これをわたしたちが自覚するなら、悪魔の試みは失敗します。それだからサタンはわたしたちに神を思わせないように、祈らせないようにするのです。

さてサタンがイエスにささやくことは、所詮人間には食べること、自分の生活が第一ではないか、ということです。神を信じるとか人を愛するとか言っても、そんなことは自分の生活が成り立ってから、後から考えればよい。——ここに、イエスの使命と目的を見失わせ、イエスの道を踏み外させようとする悪魔の意図が巧妙に隠されています。

しかしイエスはそれを見破られました。

「4:4 イエスは、『“人はパンだけで生きるものではない”と書いてある』とお答えになった。」

イエスを守ったのは、イエスの使命とイエスの道を守ったのは、聖書の言葉です。

『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」

聖書の巻物に書かれ、イエスの魂に刻み込まれた聖書の言葉が発動したのです。

パンはもちろん必要である。当たり前です。しかし「人はパンだけで生きるものではない」。パン以外に何があるのでしょうか。人がそれによって生きることのできる、ほんとうはそれなしには生きられないものがある。それは、聖書の言葉、聖書に込められた神の言葉です。

イエスがこのとき「書いてある」と言われたのは、旧約聖書の申命記第8章の言葉です。

「8:2 あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。3 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」

かつて神はイスラエルの民を荒れ野で訓練し、その苦しみをとおして「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることを経験させられた。遠

い昔の聖書の言葉が、いまイエスの心によみがえり、口からほとぼしり出て、イエスを守りました。

もしこのとき、イエスがサタンに乗ぜられて、「たしかに何よりもパンが大事であり、自分の生活が優先だ」と言われたとしたら、イエスの生涯も働きもその意味も失われてしまったでしょう。

イエスが言われたように、わたしたちも、主の口から出る言葉、み言葉によって生かされて生きて、そうしてわたしたちの信仰と生活は守られ、神に向けてまっすぐにされる。神と共に歩むことの祝福と、神と共に働くことの幸せを経験するのです。

わたしたちが本気で、主の言葉の意味と力に触れて、それによって守られ、導かれるようになるためには、試練を経なければならぬのかもしれませんが。逆に言えば、試練のとき、誘惑の時こそ、わたしたちが聖書において命の言葉と出会う時、主の口から出るみ言葉をわたしの口にいただく時なのです。

今日ご一緒に唱えた詩編第 91 編の中にこのような言葉がありました。14 節です。

「わたしに頼る者をわたしは救い || わたしを知っている者をわたしは守る」

この一言が、わたしたちを絶望から救い、わたしたちを力づけて信仰の道を歩ませます。

そのような聖書とわたしたちとの関係が、この大齋節をとおして深く確かなものとなりますように。

祈りましょう。

神さま、わたしたちに教えてください。わたしたちがあなたの口から出る命の言葉によって生きることを。あなたのみ言葉によってわたしたちを守ってください。あなたからいただいている祝福と使命を知ることができるようにしてください。試練、誘惑のうちいる人々を守ってください。わたしたちが、主イエスの歩まれた道に従って行くことができますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。 **アーメン**